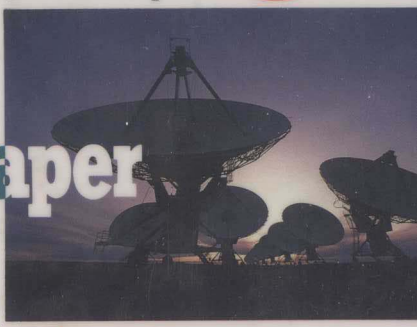
新聞特ダネを

The Newspaper



深読みする

Scoop

★Kōshirō Nishiguchi

西口孝四郎

講談社

新聞特ダネを深読みする

★Kōshirō Nishiguchi
西口孝四郎

The Newspaper Scoop

●著者紹介
西口孝四郎（にしぐち　こうしろう）

1945年　大阪教育大学卒業
1952年　大阪読売新聞　社会部入社
1971年　社会部河内支局長就任
1975年　大阪読売新聞　退社
現在　　樟蔭女子短期大学講師
　　フィリップス大学日本校講師

著書に「新聞記事の読み方・活かし方」
「新聞記事の遊び方・楽しみ方」
「文章上達新聞活用法」がある

新聞特ダネを深読みする

1992年9月25日　第1刷発行

著者——西口孝四郎
発行者——野間佐和子
発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽2丁目-12-21　〒112-01
☎03-3947-2287(編集)
03-5395-3625(販売)
03-5395-3615(製作)

印刷所——豊国印刷株式会社
製本所——島田製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、生活文化第三出版部宛にお願いいたします。

©西口孝四郎　1992年　PRINTED IN JAPAN
ISBN4-06-206107-4（生三）
定価はカバーに表示してあります

まえがき

友人、知人と喫茶店に入る。
「何か面白いことないか……」
必ずといっていいほど相手が聞く。
「まあな」
とにかくそう言ってみる。
でもたまには、尋ねた本人から、
「実は……」
と「面白いこと」を話し出すことがある。もちろん私はうまく相づちを打って、聞き手にまわる。でもこのケースはたまにしかない。ほとんどは私の顔を見て、
「あるんか――」
とたずね直す。その時の表情によって、私は、
「実は――」

と切り出す。その内容は、この本に書いてあるようなことを、相手に応じて話すことにしている。

終わったあと相手の顔はほとんどの場合、

「なーるほど」

といった感じになる。

自分の身に合ったものだったら、

「おもしろいな」

そして参考になったら、

「ええこと聞いた」

ということで帰って行く。ここまで来れば私も〝満足〟。ついうっかり、相手のコーヒー代まで払ってしまう次第になる。

でも私は生涯〝ジャーナリスト〟、〝新聞人〟と自分に言いきかす限り、このような「話」（場合によっては〝ニュース〟）を口からでも伝え続けることも〝仕事〟だと思っている。

ところでこの「面白いこと」をどう見つけ出して行けばいいのだろう。街をウロウロと歩いても見つからない。といって、だれかれとなく聞きに回るわけにもいかない。

それはやはり最も多くテレビ、ラジオ、新聞、雑誌の中から見つかりやすいと思っている。

特に「新聞」はその宝庫ではないか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

この本に書かせていただいたような面白さの記事は、一紙に毎日二―三本は絶対に見つかる筈である。

しかしこの「面白さ」ということの判断は、人それぞれによるしか仕方がない。「これこれのもの」なんて死んでも言えないが、私たちはめいめいが十分にその判断能力を持っている。

私はこの数年間に、これらの話を紙袋に五、六杯貯め込んでしまった。それらをじっくりと読み直しているうち、「面白さ」を書き残したくなった。

いや実は、これらの話をみなさんにもヒントにしてもらい、それぞれの「特ダネ」を発想し、捉え、実現させていただきたいと思うようになったのである。

現在、「特ダネ」はだれにでもその生活の場において必要なものである。これらの話がその「摑み方」の手がかりになればと考えた。

このことを講談社の方に相談させてもらったところ、『新聞特ダネを深読みする』とずばり表現して下さった。

私はまさに「目からウロコが落ちました」の思いがした。

この本は第一章で「特ダネとは」どんなものかを語り、その「意味」を第二章で紹介、第三章ではその「摑み方」の一部を書いた。しかし全体を通じて「特ダネの摑み方」をあれこれ提案させてもらったと思っている。

それにこの本を読まれて新聞を見直され、その「面白さ」を感じられる「読み方」のご参考に

なれば幸いだと思っています。

なお、この本を出していただくに際し、同社生活文化局第三出版部の坂本俊一氏からご配慮、ご指示をいただき、編集進行については塩畑陽子さんのお世話になりましたことを感謝致します。

一九九二年八月十四日

西口孝四郎

新聞特ダネを深読みする

この本のねらい

私たちはみんな、人を、相手をびっくりさせてやりたい気持を持っている。子供のころ、トンボやチョウ、セミ、カブトムシを捕りに行った。フナやコイ釣りにけんめいになった。もちろん子供のことだから、なんのために捕り、釣るのかそんなことを考えたことはない。

でも今から考えてみると、その気持の中にヤンマ、アゲハ、クマゼミ、大きなフナ、コイを捕まえて、友達、兄弟、親たちをびっくりさせてやりたいという意欲を潜めていたのではないか。

それらはみんな子供たちの「特ダネ」である。この「びっくりさせ精神」で子供たちは成長して行く。この気持を持っている限り、人は老いない。

「特ダネこそ我が生命」

こういう信念から、この本を書いた。

もちろん私は約二十五年間にわたって新聞記者をやってきたので、特にその思いがあるのかも知れない。新聞記者に特ダネはつきものである。いやつきものというより、それを追い続けるのが宿命である。

ところで、その「特ダネ」というものはどんなものか、ある先輩の記者の言葉をあげよう。

「火事の写真はな、炎々と燃えさかっているもんでないとものにならん」

実際に火事の取材では現場に駆け付けたとき、建物は焼けてしまっている。炎々と燃えている写真などはそう撮れるものではない。でもだれかがそれを撮っているものである。探せば手に入る。

先輩の言葉は、ここまではわかる。だが、

「殺人はな、ほんとうのところ、これもやっているところでないとだめなんや」

これはどうか。

そんなアホな、できることと、できないことがある。取材より先に助けなあかん——そんな言葉が口に出かけたとたん、先輩はピシャリといった。

「それが特ダネというもんや」

この無茶ともいえる言葉の意味がわかったのは、残念ながら記者の現役を辞めて、三年も経ってからであった。

わかったのは、大阪市阿倍野区内の銀行で発生した、猟銃、人質、殺人、強盗事件においてであった。

犯人は二連発の猟銃を持って押し入り、居合わせた警官や銀行員などを撃ち殺し、行員や客たち数十人を人垣にして約三昼夜立てこもり、大阪府警の射撃班の警官に射殺された事件である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

事件の最中の夜、私は現場を見にいった。もちろん銀行の中をうかがうことはおろか、そばに近寄ることすらできない。銀行の周囲を数百人の警官やパトカー、装甲車が何重にも取り巻いていた。初めて見た完璧な捕物陣であった。テレビはその現場を絶えず中継しているのだが、その画面に閉じられた銀行のシャッターを映し出しているだけで、半日以上も変化がない。取材している新聞記者たちは、行内で何が起こっているのか、独自取材は全くできない。府警の広報課発表にたよるだけであった。

私はその現場を見たとき、ふと、さきの先輩の言葉を思い出していた。

「殺っているところでないとだめ」

この雰囲気の中でそんなところが目撃でき、カメラに撮れるのか。不可能な話であった。だが、どこかの社の記者が必ずそれを実現するのではないかとも、ふと感じた。結局、犯人が撃たれ、病院で息を引き取るまで、その特ダネは出なかった。

だがその翌朝の新聞で、ある新聞社が一面トップで、犯人がチロルハットをかぶり、猟銃を水平に構え、引き金を引いた瞬間の写真を載せていた。まさに「殺っている」写真であった。その新聞社はそれをどのような手段で手に入れたのか、今もって、そのことを明らかにしていないが、とにかくそれを載せた。

このような特ダネはもちろん、異例中の異例である。いつでもどこでもこのようなことができるというわけではないだろう。

先輩の言った「殺っているところを取らなければ……」というのは、突き詰めて取材をしない安易さをたしなめる言葉だったのだろうが、実際にこういうこともある。

要するに先輩記者は、

「取れないものを取る。一応不可能に見えるもの、だれもあきらめているものをものにすることが、『特ダネ』を取るということだ」

と言いたかったのだろう。

そのためには、どうするか、それが問題である。この特ダネ獲得の気持は何も新聞記者だけではない。広く一般の職業、社会にも必要なものである。

スーパーマーケット、百貨店、自動車会社、レストラン――いやサラリーマンから政治家まで、今の時代、個人で、会社で、企業で、一つや二つの「特ダネ」を持っていないと、安心して、自信を持って生きられない時代ではないだろうか。

それではこれらの「特ダネ」はどのようにしたら得られるのか。これはいくら理屈で説明してもわからない。

ただこれらを摑まえる一つの方法がある。それは「特ダネ」を摑んだ人たちの足跡を追うことである。それによって、彼らはどのような狙いで、何を、どのような方法で勝ち得たのかがわかる。そしてその「特ダネ」をどのように活用したのか――などをはっきりと学ぶことができる。

しかし問題はそれらの「特ダネ獲得話」を「どのように探せばいいのか」、「何が特ダネなの

か」、「その勉強の仕方」などたやすいようで、難しいものである。

私はこの本で世の中のいろいろなジャンルでの「特ダネ話」を約百五十話紹介した。その資料は全て新聞によっている。新聞こそまさにこれらの話の〝宝庫〟である。

したがって、この本は新聞の一つの読み方、活用の仕方を書いたものにもなっていると思う。

これらのことから考えてみて、「特ダネ」とは、まず、まだ、だれもやっていないもの、これだけは人に知らせたいというものを見つけ出したり、キャッチすることだといえる。

新聞特ダネを深読みする　目次

まえがき　1
この本のねらい　7

第一章　「特ダネ」とは

最近の見事な「特ダネ」
「特ダネ」連日二十六年サンペイさんのマンガ　26
「十分に限る」で成功した雲仙爆発直後の火口底写真　28
軍服信仰を逆手、将校姿マネキンで脱出　31
元日銀マンが撮った古巣の〝奥の院〟タブー写真集　33
偶然的な「特ダネ」
「もうダメダ」自分で撮った墜落寸前の自分の顔　37
機長倒れ、口述操縦で乗客ピンチ脱出　40
計画的な「特ダネ」
超計算で出したアポロ11号の広告　43
ソ連崩壊の先触れルスト君の赤の広場〝訪問〟　46

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.